



音楽リズムの指導

村田修子

高等学校を卒業して養成課程に入学してくる人たちは、一応幼稚園の先生になることを目標にしている。けれど実際のようにすは、その目標に対して確固とした信念で向かっているということが、指導する側にはつきりとくみとれる人は数えるほどである。あとは、子どもの生活にふれて子どもを知るようになってから、
「自分も幼稚園の先生になる。そしてこれは思ったよりたいへんなことである」ということがわかってくる過程をとるの

が大部分である。

こういう人たちに音楽リズムの指導をしての感想などを思いつくままにのべてみる。

ねらいと指導

①動きのリズム

私どもは、大学の体育の授業時間でできるリズム指導と平行しながら、参考作
品を豊富に与え、これを知ることによつ

て、幼児の動き、幼児のもっているリズム感覚を知り、またあわせて生徒自身の身体練習をすることをねらっている。

授業のとき毎年経験することだが、四月に始まって四、五回目ぐらいまではたいへんにやりにくい。それは、今まで自分たちが属していた世界と、子どもの世界があまりにかけ離れているので、きくこと、話すこと、することなどすべてがくすぐったい、というようすで、こちらのいうことによつてこないので、その気

分をもし上げるのに苦勞をする。特に幼稚園で多く扱われる自由表現、たとえば象とか花になるのは、するのは勿論、他人がするのを見るのも恥かしいおかしくてたまらない、というようである。

そこで、幼児なら入園したのときに第一にとりあげる自由表現は第二段階にもっていき、まず第一に、自分たちも幼いときに経験して幾分覚えていゝあ、そびをして、気分をほぐすことをねらう。またこの時期に、歩くこと、走ること、スキップなどの動きの基本を十分にさせる。

そうして時期がたつにつれて子どもたちにも接し、だんだん子どもについて理解してくるので、その頃から自由表現のおり込まれた参考作品をとりあげるようにしていく。また、参考作品の中の部分をとりあげて基本練習に加えたり、文部省発行「幼稚園のための指導書——音楽リズム篇——」にある幼児に望ましい経験、たとえば音の長短・高低・強弱をき

きわけたり、それを動作にうつして表現できるなどのことがらについて反復練習をして、将来先生になったとき不自由のないようにする。

こうして一学期ぐらいたてば、単調な旋律のうたを聞いても笑うこともなくなり、自由表現も平気になり気分的にも技術的にも受入れの態勢はできてくる。けれども先生になつて子どもを指導するには、自分が得るといふ修練ばかりではだめで、子どもに与える技術がより大切である。そこで後期には、参考作品を幼児に与える場合の扱い方、注意などをおり込みながらすすめていく。

それを聞いているときはわかったというようであるけれども、自分自身で実際指導してみないことには身につかないらしく、二年の後期にある研究保育（養成課程の人が一日中すべての責任をもつて保育し、先生や友だちが参観してあとで批評会を開く）のときの扱い方をみて

いると、特にリズム指導は、ほかの保育内容よりも、教材の扱いかた、子どもの扱いかたなど不十分なところが目につくことが多い。創作的表現能力を養いつつ、子どもたちが満足のいくように活動させ、しかもおもしろく興味をもたせながら先生の計画をすすめて目標を達成するように動かしていくことは、常に流れ動いている幼児に対してむずかしいことであるが、最も大切なことである。

リズム指導を一度経験してみると、ピアノなどが達者な人でも、思ったよりたいへんなことがわかって、そのあとは事前の研究もよくされるようになるので、幼児に直接当る機会をなるべく多くもつようにすることがよい。

次にその人たちが実習で直接幼児を指導したときにみられる一般的傾向をあげてみる。

まずいろいろの条件を考えあわせて、最もよいと思われるように頭の中で計画

をたてる。その計画もときには、扱うものと年令との関係、その配列など不適当な場合もあるけれど、計画についてはまあたいした見当はずれはない。さてこれに従って指導していくと、子どもの活動のようすをみる余裕がないので、第一の計画のものをくりかえし三回しようと思っていると、子どもがもつとやりたくてもそれでおわりにし、また反対に、もうつかれてしまって、それが分るようには動作に出てきても、途中でやめることはしない。そして第二の計画のものにうつるとき、その移りかたがスムーズにいかないでむだな間ができるために、せっかくいままで作ってきた雰囲気をごわされてしまうことがたいへん多い。そうすると、こんどは子どもをまとめるといことがむずかしくなってしまう。また二人組んで動作をするとき、自分たちだけでは組むことがむずかしい人たちをやっと二人組にして動作し、次にはまた一人に

し、また次に二人組ませるといように扱いかた扱う手ぎわが下手なのでまとまらなくなってしまうという場合も多い。

子どもの動きをみながら、計画をそのようすにあつたように伸縮自在に適宜変更しながらすすめていくのは、やはり経験することが一番近道の方法である。

次に音楽リズムの他の領域について少しあげてみる。

②うたうこと

いろいろ幼児のうたをうたうときに、そのときに応じて、うたいかたについて指導する。

声の出しかた、発音のしかた、曲の強いところ弱いところ曲のもり上り、曲想、歌詩との関連など。また曲の構成、曲の中に出てくる楽典について、簡単な和声(二度・四度・五度およびそれらの転回)について復習のいみで適宜質問したり解説したり、という形式ですすめていく。

また楽器と関係があるので読譜力をつけるために、移動ド唱法が自由にできるようにということをやっている。また、年令的にはむずかしい時期になっているけれども、音が分るのも必要なことなので、聴音のようなことも歌をうたうときに折りこんでいる。

③ひくこと

ピアノの指導は個人的に他の先生がみて下さるのでここでは取上げないが、もっと時間的に余裕があれば、幼児の扱う簡易楽器の合奏をしたいと思う。譜の見かた、楽器の正しい扱いかた、曲の編曲のしかたについてひと通り知り、もつとできれば、あまり旋律楽器を扱えない幼児と一しょに合奏して美しい音楽を作り出すために、アコーディオンなどの旋律楽器、吹奏楽器、小太鼓などの打楽器ひと通りについて修熟しておきたいと願っている。